

令和二年度八戸三社大祭に関する御質問等への回答書

令和二年 7月 8日

法霊山籠神社

問合せ先：権禰宜

法霊山籠神社では、本年度八戸三社大祭の縮小斎行に伴い多くの団体及び個人より問い合わせを受けており、新聞紙面をはじめ各種報道、インターネットなどに掲載された情報を基に個人の思い込みに基づくと思われる情報、または籠神社として看過できない作り話の様な間違った情報等が蔓延している状況である事を確認しております。

この報道の在り方に関しては県内神社関係者の間でも意見が分かれるところで、当神社の回答一つで県内他神社の祭礼などへ不都合が生じる事のないよう、難しい立場に置かれていると痛感しているところです。

したがって本回答書はそのような状況を鑑み、あまりにも間違った情報や意図しない表現を当神社から貴社へ提供する事の無い様、口頭での回答を控えさせて頂き、文章回答を原則とするために作成したものであります。

本回答に関しましては、斯界でのトラブルなどに対するリスクマネジメントの意味でも、貴社に於いて紙面に掲載されたのち、当神社ウェブサイトにも掲載させていただくものでありますので、どうぞ御了承の程お願い申し上げます。

御 質 問 等 に 関 す る 回 答

■ 八戸三社大祭の起源について

回答：具体的な起源などは多くの出版物などに詳細がありますので概略だけ申し上げますが、享保 6(1721)年に豊作感謝・祈願の為に執り行われたものであると認識しております。陸奥国八戸総鎮守である法霊社の祭神に、自らが治める郷の様子を見て頂き、御神威の更なる発揚を願ひ藩内城下町を神輿にて渡御して頂いたものと伝わっております。その豊作祈願という部分に関しては、当神社が奏上する祝詞文面にも現わされており、疑う余地もないものと思っております。

しかしながら過日「元々は病魔退散の意味で始められた」という報道を目にしましたが、これは当神社においては全く把握していない由緒でありました。これが私共の確認不足で事実であれば、当神社の祭典における祝詞、また行列内容をも趣旨に基づいて訂正しなければならない大事でありますので、掲載されている古文書や記録などがあれば是非ともご提供いただきたく、どうぞ貴社におかれましても御協力の程お願い申し上げます。

- 新型コロナウイルスの感染拡大の影響で規模縮小となった今年の祭りのことと、どのように受け止めているか。その中で、改めて考える祭りの意義とは。

回答：竈神社の立場としては、八戸三社大祭において最も重儀である例祭という最小限の神事は、何時如何なる状況においても斎行されるべきであると考え、誠に残念ながら付帯行事としての神社行列の中止を決定し、例祭のみ執り行う事を決定した次第です。但し、神社行列の神事が中止されたとしても、崇敬の誠を奉斎する意味に於いて、また神職の本分とされる祭祀の厳修という意味に於いては変わるものではありません。

しかしながら、行列を楽しみにしていた方々の心情等や経済活動上多方面に与える影響が大きい事等は当然竈神社でも把握しており、そういった部分に於いては地域の一住民として心を痛めております。

また、何らかの事情で本年度大祭参加を最後と考えておられた方々や、進学や就職の都合で来年からは参加が難しい状況に置かれている方々にとっては、如何程の心情で規模縮小の決定を受け入れられたのかと思うと、やり切れない思いでおります。

一方で、三神社とも常々大祭の本質を意識して例年大祭に望んでいるものでありますので、規模縮小になって改めて祭りの意義を考えるという事はありません。この意義や本質が重要であるという点に関しては、毎年7月中旬に開催している竈神社三社大祭関係者総会に於いても、各山車組、芸能団体、町内会長等に対して毎年のように繰り返し伝えております。

竈神社は、三社大祭を我が国の国体・民族性・道徳心そして地域性などを継承する精神性の体現と考え、それが大祭の本質的な意義と捉える考え方に変わりはありません。

- 例年行っている神事とは、具体的にどのようなものか。

回答：三社大祭における神事とは、一般的に言う宵宮祭（前夜祭山車展示）、各神社諸祭典、行列運行、中日合同運行、後夜祭までが含まれます。

御質問の意図として、各神社で行われる祭典の事を対象とした質問であると推察しますが、神事という言い方になれば上記のような事になります。

また、例祭(祭典)以外の行事に関しては、行列運行を含めてあくまでも例祭の付帯行事であります。最も重要なことが例祭であるのは間違いのないものの、行列運行も神事である事は間違いありません。また前後夜祭や合同運行に関しても、神社行列が出ないからといって神事ではないという事ではなく、あくまでも三社大祭の付帯行事である神事となります。竈神社にて執り行う祭典等諸祭祀に関しましては、別表をご覧ください。

中でも本年執り行われる中日例祭に関してご説明しますと、八戸市全域の発展安寧、八戸南部家の弥栄、農商工業などの豊穰を祈願する祭典となっており、例年参列者の7割程度が観光客となっています。

本来は神社総代・氏子町内会長・芸能団体・11山車組が参列して執り行う事となっておりますが、実際は神社総代・氏子町内会長・芸能団体・観光客・一般参列者で執り行っています。

この神事の示す範囲や祭典というものの存在や意義に関する部分は、神社会でも大変大きな物

議を醸している話題でありますので、貴社におかれましても間違いのない報道をお願いいたします。例えば、行列は中止して神事のみ執り行う、というのは間違いで、神事の中の行列は中止して例祭(又は祭典)のみ執り行う、という言い方が正しいかと思えます。

また、竈神社では9月2日の大祭式例祭をおさめて三社大祭が終了となりますので、8月4日の後夜祭で全日程が終了したという事ではありません。

■ 規模を縮小して開催する今年の祭りにおいて、実施する部分は。

回答：別紙にて一覧を準備しております。

■ 起源から300年目という節目を迎えたことについての受け止め。

回答：まずもって、三社大祭は本年300年目ではありません。三社大祭として三神社合同例祭となったのは明治十九(1886)年である事が当神社28代宮司の書から確認されておりますので、今年三社大祭135年目の年となります。

300年はあくまでも当神社で始まった三社大祭の起源となる法霊社祭礼(法霊山竈神社例祭)の発祥を遡ると300年目という事であり、これを並列に300年目と述べることは、他の2神社御祭神が当神社御祭神の都合に合わせる事になり、宗教的観点からみても著しく2神社御祭神の尊厳を傷つける事になります。また15年後に改めて3神社そろって三社大祭150年を祝おうとした場合に差し障りが出ますので、表現の方法に関しては特段の配慮をお願い致します。

さて、当神社における祭礼300年目に関してですが、まずは300年間継承してきた先人達の尽力とその想いがあって、今の我々が祭を執り行う事ができるわけですので、その尊い精神性をどのような意味を持って将来に継承していけるかを、300年という節目によって問われていくのだろうと考えています。大きな祝いの年であり、また注目される事によって祭の意味や価値を問われることになるのは、この質問を頂いていることから明らかです。

この節目は、「八戸三社大祭起源 法霊山竈神社例祭発祥三百年大奉祝式年祭」として当神社にて祭典及び記念事業・記念式典・祝賀会等を行う予定となっております。

■ 今年の祭りの規模縮小が決定した後に見えてきたもの、思いなどは。

回答：規模縮小決定後、多くの団体や個人から、この機会にあらためて祭りの本質を見直すという立ち位置で云々、という話を相当数頂いております。山車行列がなくなったことで多くの方が同時に同じような事を考え出したという状況を受け、あらためて三社大祭における神事というものが形骸化しているのだと再認識しました。

本来、神事である神社行列が所謂イベント的要素に捉えられている現状を、当社と致しましても懸念するとともに、改めてその本義を御理解いただくべく努めて参らなければなりません。

祭祀の厳修と氏子の教化育成という神職の本分を忘れず、伝統だ観光だなどという一般的な風潮に惑わされることなく、最も重要な日本人としての精神性をいつの時も伝え続けていく事こそが重要と考えます。イベント的観点から日程を参加者の都合で変更したい等という暴論が平気で出てきてしまうのも我々神社側が伝えるべきを怠ってきたのが原因だったのかと考えると悔やまれる部分が多々あります。

本当に重要なのは伝統の形でも観光のあり方でもなく、社会道徳や郷土愛、愛国心や自国への誇りなど、民族としての精神性に尽きると考えます。

今後世界情勢が乱れ有事となった場合等には、国民の団結や精神性が問われる時が来ます。その時に各個人が身勝手な行動を取るのではなく、性別年齢の区別なくお互い学び協力していく事が必要と考えますが、これはまさに山車を作って運行する現場の本来の在り方そのものです。大人たちが若者に教育し、時には怒られることがあり、また長老たちから多くを学び、褒められた子供達はその喜びを忘れず、自分が大人になった時にその学びや経験を還元していく。それを体現し育む場が三社大祭であって欲しいと切に願います。

■ 祭りの今後について思うこと、議題など。

回答：現在 3D プリンタが存在し、短時間で多数の部品を簡単に制作することが可能となっているわけですが、いずれはそれが山車作りのスタンダードとなってきてもおかしくないのではないかと考えています。

事実、過去には山車作りにおいて木製の造作物を発泡スチロールに切り替えた時期があり、神事に発泡スチロールなんかを使うとは何事かと物議を醸した事があったと聞いておりますが、しかしながら今やそれは当たり前のこととなってきています。

また、せり上がりの部分なども、スクリーンへの投影やプロジェクションマッピングのような手法が使われてくることも無いとは言えません。事実 30 年前の山車現場においては、コンピューター制御など考えもしなかったわけですが、現在ではそのような方法も使用されていると聞きます。

一線を越えるという意味では、過去の出来事もこれから起こり得る出来事も大差はありませんので、現在山車に取り組んでいる方々の一部を見ていると、このような未来が訪れる事は決して夢物語ではないと考えています。

これらがいい事か悪いことなのかの判断は神社としてわかりませんが、そこには、枯山水の庭園を見て美しさを感じたり、時代装束に悠久の歴史を垣間見たりという、日本人独特の美意識は失われてしまっています。日本誕生の昔から現在へと続いている神社神道の今がそのような状態になってしまうのは、大きな悲しみを感じます。

同時に、糺神社としても本来の意味を維持することに四苦八苦しています。

例えば御通り行列ですが、三日町札の辻交差点出発となると、糺神社はその発祥にもかかわらず御通りの際に神社の氏子地域を一度も経由せずに終了している状態となります。本来の意味通り糺神社出発であれば内丸と番町を経由しますが、特に内丸地域は、鎮座地であるにも関わらず三社大祭で何一つ得られるものがない地域となっています。

山車組や神社が直面していくであろうこれらの問題も、神社や御祭神という存在を意識せず議論が行われる事に問題があると感じており、今後の課題と捉えています。

また、神事の枠に捉われることで山車の魅力を生かした大祭が難しい、又は神社との合同祭は不必要という御意見も頂くことがあります。当然ながら神社としては山車組とともに今後も大祭を執り行っていきたい意向ではあるものの、もしも神事である事が山車組運営の足枷となるのであれば、神社神事の三社大祭と山車の行事を別の祭りとしていくのも一つの方法と考え続けてきました。山車にも長い歴史があり、魅力があり、それ自体が価値を持っているものがありますので、八戸風流山車パレードという様な新しい祭りがあってもいいのではないかと思います。

■ 八戸三社大祭が大切にしていけるべきものは何か。

回答；日本人としての精神性・美意識、民族としての誇りこそ守り伝えていくべきものと考えます。

震災の折にコンビニなどに列を作って並んでいる姿を海外メディアが称賛しておりましたが、日本人としては違和感のない光景と感じた方も多いと思います。そのような崇高な民族性・精神性は諸外国と比べて劣るものではなく、誇れる事であるはずで。

それにも関わらず劣等感を覚えたり海外に対して自信を持ってないのが日本人の特徴といわれていますが、自分を優先する個人主義に比べ、人を慮る日本の特性は、大変美しいもので、劣等感を覚える必要などありません。

また、古いものを否定し、異国の文化を妄信的に新しく優れていると考える風潮もありますが、それでは古いものの何がダメなのかを具体的に聞き返したとき、納得できるようなまともな回答を得たことがありませんでした。

そのような事も含め、綺麗ごとではなく、事実として日本の精神性を大切にしていける事が重要であると考えます。

■ 市民に考えてもらいたいこと。

回答：轟神社に於いては、旧来より陸奥国八戸総鎮守の時代から続く大祭として、八戸市全体の発展安寧を祈願する諸祭祀を執り行っております。したがって、氏子地域や山車組が存在する場所の人々の為の祭りではなく、八戸市全体の祈りの場として三社大祭は存在します。

三社大祭を今後 400 年 500 年と継承していくために市民の皆様に来る事があります。それは参加することです。長くやっている人達の関係に新しく入っていくのを躊躇う方も多く聞きますが、三社大祭は現在参加している人たちの為の既得権益でもありませんし、株主のような権利を保有する方々でもありません。

お子様と一緒に、友達度同士など一度参加してその経験を伝えていく事で、伝承は起こり続けていきます。

例えば学校単位でも構いません。地域教育の一環として、コミュニケーションの場として、多くの方々に参加頂き、その精神を伝承して頂きたいと願っています。

■ 八戸にとって、八戸三社大祭とはどういうものと考えているか。

回答：現実論として、三社大祭が多くの八戸市民に嫌われているという現状を見聞きします。騒音や驕り高ぶった態度など、関係者以外では三社大祭を良く言う人が少ないのは我々も承知しております。靄神社でも、直接または間接的にその様なご意見を毎年の頂いております。大祭関係者は約 3000 人程度と伺っておりますが、残りの八戸市民にとって関係ない忌み嫌うものではなく、生まれ育った八戸の同郷人として、一緒に発展安寧を願って執り行っているお祭りへと価値を高めていける事を期待しています。また、今現在八戸にとっては経済活動のコンテンツとして利用する価値があるものだという程度の祭りだと認識しており、実際三社大祭によって八戸の知名度が著しく向上した等という体感も全くない状況ですが、神社としては常に八戸の為の祈りの場として続けていく事で、その精神的価値を高めていきたいと考えています。

■ 今後願うことは。

回答：まずもって最も訴えたいのは、三社大祭は神社と山車だけではないという事です。例えば当神社行列には3つの虎舞組、重地太神楽、法霊神楽、笹の葉踊りなどの伝統芸能が参加します。このような芸能団体は、山車組が100万を超える多額の補助をもらっている一方、一切の補助もなく、芸能を愛する思いと誇りで身を切って参加されている方々です。靄神社行列というのは、神社の先頭旗から靄神社につく11番目の最後の山車組までを靄神社行列と言います。その現れとして11番目の最後の山車の後ろには、行列後抑えという所役がついています。その靄神社行列の中で並ぶ場所が違うだけで、山車も伝統芸能も行列の一部であることに何ら変わりはありませんが、伝統芸能が目され、取り上げられる事はほとんどありませんでした。このように一部の犠牲の上に成り立ち、一部が利益を得るような神事では、その本質を見失っていき事になりましょう。本義を見失わず、権力や自らの社会的地位の為に利用せず、必要とされる祭りへと歩みを進めていく為にも、山車も伝統芸能も同じく扱っていただきたいと切に願います。また、伝統か観光かというような、どちらか立てればどちらかを犠牲にする必要があるという、よく理解できない議論があります。伊勢の神宮での式年遷宮はじめ、伝統と観光が両立しているケースは全国に多くあるにも関わらず、八戸ではその様な議論になっています。これは両立する手法を考え出す知恵が我々にないだけで、方法が存在する事は全国のケースが証明しているわけですので、神社が伝統の厳かな継承に努め、観光経済の専門の方々と協力して両立を目指していくという関係性を作り上げていける事を期待しています。